

**<日本研究の有意義性 The Relevance of Japanese Studies> 韓国における日本研究：陶磁工藝を中心に**

著者	朴 正一
雑誌名	世界の日本研究
巻	2015
ページ	141-144
発行年	2016-05-31
特集号タイトル	「日本研究」を通じて人文科学を考える Contemplating the Humanities through Japanese Studies
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006367">http://doi.org/10.15055/00006367</a>

## 韓国における日本研究——陶磁工芸を中心に

朴 正一

韓国は1945年に独立し、1950年に朝鮮半島の動乱により、国の生産基盤が壊滅的な被害を受けたが、1970年代から始まる国家再興のための努力により、「漢江の奇跡」と呼ばれる経済産業の発展を成し遂げたことで有名である。

それとともに、教育や学問分野への関心も向上し、70年代に入り、日本に関する研究も行われ始めた。大学教育においては、60年代からソウルの韓国外国語大学や国際大学に日本学科が設けられ、のちに大邱の啓明大学、釜山の国立釜山大学、釜山女子大学などに日本学科が設置された。当時、大学院の修士課程は、韓国外大、啓明大など数か所にしかなかった。80年代、東国大学に初めて日本学研究所が設置された。

1980年代から、日本語を教える高校が急速に増加し、大学にも日本語を教える学科が増え続けた。現在、4年制大学は170校をはるかに超えているが、その中で日本語科、日語日文学科、日文学科を設置している大学は100校以上ある。学科名に「日本学科」という名称を持つ大学は一時10校近くあったが、2000年以降は減少傾向にある。韓国の大学は学内の統廃合が急速に進んでおり、学科名が多様化して、「日本語科」も減少している。

過渡期を過ぎて、状況が安定するまでにはまだ時間がかかりそうだ。日本学を学ぶ大学院は、全国において修士課程だけでなく、博士課程も多く設置され、その数は驚くほどである。また、日本関係の学会も、初期の「日語日文学会」と「日本学会」だけの二極構造から、全国規模の学会が地方に複数できた。さらに、大学の10余りの研究所が、韓国科学財団の公式認定を受けた論文集を発行し、日本研究の量と質はかつての時代とは比較にならないほど進歩している。

韓国における日本学では、日本のすべてを学習・研究の対象として包括的に捉えている。浅く広い傾向から、より深化したものになったのは、90年代もかなり過ぎた頃からであり、特に日本の新しい研究方法を学んだ若い研究者が増えてきた。しかし、成長の期間が短いため、日本研究の中で注視されていない分野があり、その一つが陶磁器関係の研究である。

韓国の陶磁器研究は、伝統的には朝鮮の官窯の流れがメインであり、民窯の発達も注目されている。一方、日本に伝来したいわゆる「粗質白磁」は考察の対象になることはあまりなかったが、広い文化史的観点からそれに言及することは可能なはずである。考古学や美術史などの観点からみれば、高邁純潔を求める儒教思想の影響を長く受けたため、高麗青磁を経た後、朝鮮白磁としてはより純白なものを目指す陶磁器が作られ続けた。それがために、隣国日本に伝来した陶磁器に対する研究に深い関心に向けることはほとんどなかった。その傾向は、15、16世紀の陶磁研究において特に強いのではないと思われる。

例えば、釜山の草梁の和館の再検討は、20世紀初期に浅川伯教の「釜山窯と対州窯」によって始められたが、半世紀以上過ぎてても日本側からの研究が主であった。モノ・人・情報の移動する現代の学術研究では、外国研究者を交えた共同研究と、充実した情報の共有は重要である。集学的（multi-disciplinary）、学際的な（cross-disciplinary, inter-disciplinary）情報通信技術（ICT）は、陶磁器文化の研究調査にも活用する必要がある。

韓国側から見た朝鮮陶磁器と日本との関係については、壬辰・丁酉の大戦後の朝鮮捕虜に関する研究や、北九州を中心とした陶磁器と朝鮮の陶磁器との関係をテーマにした論文がいくつかあるが、非常に少ない。陶片の発掘調査では、日本との比較研究はほとんどない。近年、韓国での発掘調査が増え、ある程度の成果も出ているが、全体として、発掘調査の件数は少ない。例えば、釜山においては1970年代以降、特に80年代から急速な市街化が進んで、所謂、埋蔵文化財が69箇所、年間の発掘数は約30件に過ぎないのが現状である。

また、伝世品に関しては、その実態が完全に把握されていないのが実態であり、比較的な研究が期待される。さらに、茶礼の中の茶器と、茶の湯で使われる茶道具としての茶碗との関係性、それらを支えた社会経済的側面からのアプローチも大切だと考える。

次に、韓国の陶磁器教育に関しては、日本と大きく違い、初中等教育機関だけでなく、大学の学科で陶磁器を教える機関も多い。例えば、ソウル地区では梨花女子大学、慶熙大学、国民大学等、釜山地区では東亜大学、釜山大学、新羅大学等、また他の地区にも陶工育成機関や陶芸を学べる教育機関がある。その中には、梨花女子大学のように大学院課程で陶芸を学べるところもある。

韓国の焼き物産業は、赤焼きを最初として4千年の歴史があり、高麗期の青磁、朝鮮期の白磁など優れた作品を産出してきた伝統を継承しようとする高い理念がある。陶磁器の町である利川は、2010年ユネスコ工芸分野でクリエイティブ・シティに認定され、韓国の沈滞した陶磁器生産を復興させる契機となっている。日本の陶磁器生産は、17世紀から始まる磁器生産を出発点として、有田、伊万里、薩摩など世界的なブランドを作り出し、近現代まで息の長い生産活動を行ってきた。韓国の過去の輝かしい栄光それ自体は高く評価されているが、近現代以降の停滞からの脱却は容易ではない。このような状況下で、技術的にも美術的にも日本からの文化受容が盛んに行われている。

韓国の自国文化としての陶磁器と日本の陶磁文化を比較研究する時、いわゆるモデルと複製、文化の相互影響を合わせ鏡として、より創造的な見地から研究する動きがある。昨今、新しい研究者が中心となって日本の研究者と少しずつ行われ始めた共同研究により、史料的記述が少なく、大きな限界を持つこの分野でも、韓国と日本との全体的様相を浮き彫りにすることができると考えられる。

具体例を示すと、日本の茶の湯で重宝がられる高麗茶碗の多くが、16世紀朝鮮の南部地方で焼かれたものと考えられる。当時の朝鮮で焼かれた白磁や粉青沙器の一部は日本に伝来し、数寄者や武将に好まれ、侘び茶の世界で茶器として大切なものと見られた。その後、注文茶碗という形で、組織的に日本に持ち込まれるようになった。

その中で伝世品の「井戸茶碗」は特別な位置を占めている。現代韓国の陶磁器の見方からすると、すべてが「粗質白磁」の中に分類されている。あるいは、「軟質白磁」と捉えられることもある。言語の違いがあるため、日本研究者の間に、次のような用語の差異がある。

韓国語	日本語
粉青瓷	粉青沙器、三島、粉引、刷毛目
青画白瓷	青画白磁器、青花白地
鉄画	鉄絵
銅画	辰砂
熊川サバル	青井戸

以上のような差異は複雑な課題を含んでおり、今後の検討が必要である。ただし、日本語のひらがなによる韓国語表記は、韓国の言語習慣を尊重し、韓国の伝統文化を考慮しながら、その整合を図らなくてはいけないので、研究課題の一つである。

最後に、朝鮮陶磁器の編年史については、日本側では浅川伯教の5期説、奥平武彦の2期説、韓国側では金元龍の2期説、鄭良謨の3期説、姜敬淑の4期説などがある。昨今の研究調査の結果、3期説が次第に有力になりつつある。このような全体的な大きな流れの中で、茶の湯で取り立てられたいわゆる高麗茶碗は16世紀から18世紀以前までに作られたものであり、井戸茶碗は16世紀に作られたことも次第に明らかになりつつある。ただし、調査資料が極めて乏しい韓国において、古窯地は明らかになりつつあるが、井戸茶碗の陶片はまだ発見されていない。今後の考古学的調査結果が期待される場所である。

また、白磁といっても、実際には枇杷色もあれば、アイボリーもあり、青もあれば、黄色もあり、色彩一つをとっても多種多様である。これら全部を包括して呼称しようとしても、その指し示す対象は非常に広範囲であり、造形的にも自由な創造性と魅力に富んでいる。

昨今、マルセル値を使って表記するなど、近似色を釉の発色や胎土の色調の記載に使用している。科学的に色彩を捉えようとしているが、例えば、10Y6/2と7.5Y6/2の違いは何かと言えば、オリーブ灰色と灰オリーブ色の違いということになり、人間の色彩感覚とは少し距離がある。このような実態の本質・意味・特徴に対する究明はまだ充分になされていないように思う。今後の研究成果に期待したい。